

ずいぶん異なるものになるだろう。住居内部と外部に対する空間領域の連続性は、過密なわが国の都市生活だからこそ是非実現させたい。また実行したいものである。

日本は一応物の豊かな国になったが、長期的視点をもった土地（国土）利用計画や住生活・生活環境の分野で

は海外に学ぶ点が沢山あると思われる。次の機会には家族の住生活・社会生活のあり方を、またどのような条件のもとで外部空間を配慮することが可能となるのかを、住居内にはいつて調査してみたいと考えている。

（群馬女子大学）

還 暦 前 後

濱 英 彦

東京で小学校6年、中学校（旧制）5年プラス浪人1年を過ぎて、高等学校（旧制）の3年間は松本でアルプスを眺めて暮し、東京へ戻って大学3年間を終えると直ちに人口問題研究所（厚生省）へ勤めて31年が過ぎ、そのあと成城大学へ移って4年が経過しようとしている。かくして本年還暦に達する人生60年の生活も数行にしてつくる。この間にももちろん戦争の大事があり、思い起すことも多いが、今ここに至って一番に印象的なことは国立研究所と私立大学とでの生活のちがいである。前者は中央官庁の付属機関として組織的なタテ割り社会を基本とし、後者は私立大学として個性的なヨコ並び社会の典型だと感じている。対照的な2つの職場をみずから渡ってみて、いずれの生活も自分自身のわがままを基準としてみて一長一短、まことに興味深い。具体的なことはどちらからもお叱りを受けるので、口のなかでつぶやくにとどまるが、それにしてもなぜ大学へ移ったのかと人にきかれ、みずからにも問い、その公式的な回答は研究の原点にもう一度帰りたいなどと恰好のよいことを一応は云ってみるが、ほんとうのところはあの長い長い夏休みが何とも欲しいという即物的な願望が一番先にあった。しかしいざ手に入れてみると、その夏休みがさっぱり生きないのは、やはり次元の低い願望のせい、または夏休み体験不足のせい、とはいえない。いまや大学へ移って4年が過ぎ、生活切換えのごときモラトリアム期間も終り、かつ還暦にふさわしく何ごとかを再出発させたい、

させるべきだと寝ころがっては思いを馳せる。

ところがかつて人生50年、実際には男子46歳、女子49歳の戦前時代には60歳はすでにプラス10年以上を経過し、めでたきよわいがあったかもしれないが、いまや人生80年の時代ともなれば、このあとまだ20年を残すということであって、とてもめでたいなどと云ってはいられない。ただし生命表をみると、1985年に男子60歳が20年後——それはもう21世紀だ——の80歳までに生きる生存確率ともなれば、およそ46%、半数を切るなのであって、これはいささか気を悪くするデータである。そういう20年をにらんでの再出発は1年1年を積みあげる心がけが大事というべきだが、ほんとうのところ年をとると体力・気力・知力・経済力などすべてにわたって個人差が大きくなるのであって、平均値的な発想や対応はあまり有効でない。もっとも研究者稼業・経済力に関するかぎり青年期から低水準のままであるが、困ることは思考の源泉となる気力・知力といったものがこれからどの程度に落ちてゆくものか見通せないことだ。近ごろ家のなかで何か用があって別の部屋へゆき、何の用か思い出せないことがふえ、少し年上の先生にそのお話をしたところ、そんなことはしょっちゅうありますよという御返事で大いに意を強うしたが（?）、ともあれ還暦からの再出発とあれば、このようなおどろおどろしき気配には素知らぬ顔をして、まずは再びあくなき好奇心を内側に燃やして前進のエネルギーとすることが肝心と私自身思い込んでいる。

（成城大学）

地球システムの立場からみた地学

浜 田 隆 士

学問の進展が専門分野の分化と深化とに支えられ、今日の近代科学隆盛を生むに至ったことは、否定仕様のな

い現実であり、歴史的経過である。ところが昨今、総合の時代、量から質への転換期、などと唱えられ始めてい